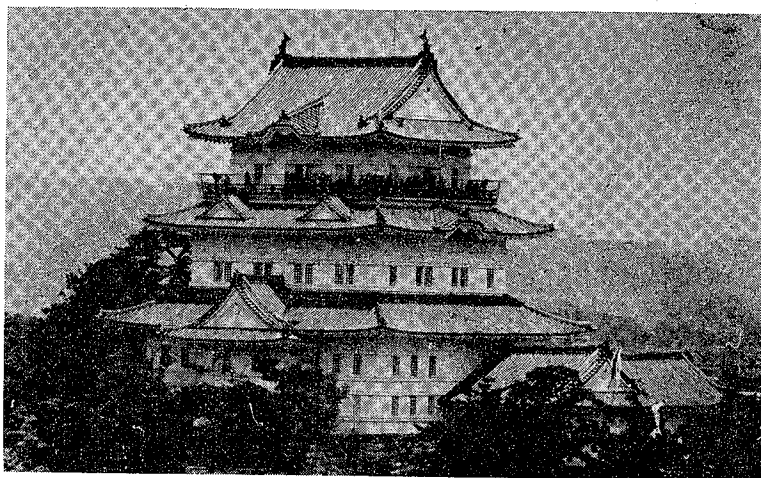


小田原城天守閣の雄姿



小田原史談

第35号
談目内
小田原史
史丁館
小田原市
市幸文
所原土
発行所
小田原
郷

印刷の御用は
清水印刷
小田原市幸一ノ一七
電話小田原三四七七番

歴史の一齣

いまの日本人にとっては明智光秀も織田信長も、豊臣秀吉も徳川家康も敵ではありません。平清盛も源頼朝も一人の日本人として考えています。味方でも敵でもありません。歴史の中の一人一人、恩讐を超えた一人の日本人に過ぎません。当時は天下を二分して、敵と呼び味方とすがっていました。しかし、それは一時のことです。永い歴史の一齣にしか過ぎません。

いまでも中共と台湾は敵として対立してきました。いまでもそうです。世界の大部分の国は、全中国の代表政府は蒋介石の側としてきました。中国共産党は正統の政府ではないことになっていきました。それをフランスが急に中共を正しい政府として認めました。そこに世界が大きく揺れました。世界は変化しようとしています。

世界には沢山の国があります。その中には一千万の人口さえも持っていない小さな国も沢山できています。それに一方では七億の人口を抱えた中共です。そこに蒋介石主席の国民政府と中共の二つの政府が対立しました。こんなことはいつまでも許されないので当然です。時は流れます。いよいよはつきりしないと、世界中の問題が解けない時代になりました。時は万事の解決者だといわれます。

利害で対立する。主義主張の対立する。一宗・一派。一党にかた寄って、大切な人間同士の憎しみ合いはまったく悪かなことです。どうせ人間は、自分の力だけでは

自らを守りきれません。守られて生れた人間は、常に自らを守ることから解放されるのが賢明です。相手を生かしながら、その中に自らの生きる生を固めて行くことこそ、賢明な歴史のさばきに添える道であると信じます。

(常岡一郎氏主幹「中心」より)

小田原城は呼んでいる

蓑田長平

小田原城は生きている。たえず何事かを呼びかけている。

歴史はたえざる進歩の集積である。と誰やらが言った。確かにその通りである。我々は北条五世の業績の上にとトレイトで戻ることにはできないが、現代人は現代の心をもつて、北条時代の当時を振り返って見なければならぬ。それによって四百年間の歳月に、物質文明・精神文明かどれだけの進歩を(或は退歩を)来たか、また今後の歳月がどう変化するかを考えて見る、これが歴史的に時間的に生くるものの運命であろう。歴史の重みはなかなか意味深長である。

小田原城は単なる観光の具ではない。北条五代の豪華さを語る骨董的存在でもない。我々はいま小田原城が何を語らんとするかを耳をすまして聞くべきである。

一夜城を公園に

「秀吉の一夜城」といって、まに付し置いてよいだろうて、天下に有名な石垣山の城趾がいまなお石垣と井戸とをらし、昔の面影を窺い知ることを得るのは、史蹟保存上うれしいことである

私は小山原城が修理を加えて、めづるべき「小田原評定」天守閣が立派に建て直されたと今日、石垣山を現在のま

葉も残っているが、それよ

りも秀吉の一夜城が史話として興味深く後世に伝わっている。私の小学校時代には秀吉の奇智によって一夜のうちに白亜城が実現したと聞かされたものである。唇気穢ならばいざ知らず、いかに秀吉が奇智に富んでいても、一夜のうちに城ができて上がるとは、人間わざとしてでき得るべきことではない。

今日多くの観光客中、小田原城とともに一夜城址も訪ねてみたいと思う人がかなりあろう。小田原城より見た一夜城、一夜城より見た小田原城、彼れ対照して当時の戦況を追懐することは、興味深いことに相違ないのである。今日、説をなすものに、小田原市はなぜ小田原城の復活には力窟を入れて、一方一夜城をそのままに放置するかと問う人もある。中には一夜城は市民に取って分が悪い。歴史はすべて土地の品負目に伝えられるからと説く人もあるが、かかる偏狭な考えを持つ人は今日一人もあるまい。試みに考えて見るがよい。北条氏の滅亡は四百年前である。その後小田原を支配したものは、秀吉方に

属して北条方に敵対した徳川家康の家臣大久保氏である。代々大久保氏に恩顧を受けた藩士の子孫は勿論、その他においても北条方とは何の縁故もない。勝敗は兵家の常であり、両方の依り負など思っても見ないことである。

かかる誤解は何等意に介するところでないが、一夜城を現在のままに置くことは、史蹟文化財の保存上面白くないのみでなく、市のために策の得たものではないと思う。そこで私の提言したいのは、城跡のある程度修復して原形の保存に注意し、昔面影を残すとともに、風景の美に富む附近の土地を買収して公園を造り往復に便ならしめるためにロープウェイを設備したならば、多くの遊覧客を誘致し、ハイキングコースにも便利となつて、市のために一石二鳥にも三鳥にもなるのではないかと思うのである。(斐田)

人力車の発明者

杉崎 正五

人力車の発明者については諸説があるが、実際の発

明者は西田虎次郎でその子中川キン八十九才は現在小田原市山王松原に住んでいる。その談話と信頼すべき書類等を調査したところでは次の通りである。既に今日まで発明者として三人があげられている。

第一番目に和泉要助。明治三十年三月一日に人力車の発明者だとして年金給与の申請を国会に提出した事がある。所が時の貴族院議員で調査した結果、真の発明者は和泉要助にあらず西田虎次郎なりとし年金給与の申請を却下し改めて西田虎次郎に授えるように貴族院議長公卿近衛篤磨氏より意見書を附して、内閣総理大臣伯爵松方正義あてに回わしたが、三月二十四日第十議會ではこの問題は審議未了のまま閉会となつてしまった。

第二番目に鈴木徳次郎。

終戦後毎日新聞に発表された事がある。千葉県松戸市戸定元山、海軍技術中将元東大教授中將元徳川武定氏によって古書の中から鈴木徳次郎の日記(明治六年十一月の物)を発見した。その中から人力車発明の動機車体製造と営業官許を受け

る迄の苦心を発表された。その発明動機は慶應三年五月二十一日友人と川崎大師に参拝に行き渡船を待っているところを津籠人足等が強そうに客なら煙草代を、弱い客なら賃金の増額を強要するのを見て一人を一人を運べれば運賃も安く一人一人一人では賃金の強要もないだろうと思ひ、作つたという製造に関しては明治元年

和泉要助を仲間を誘い同年七月高山幸助という車職に車を作らせたと東京文京区初音町長明寺門の記念碑に書かれていて、和泉要助は単に共同経営者にすぎなかつたとして、明治三年三月三人で挽車の営業を東京府へ出願したという。

第三番目にテレビで秋葉大助が人力車の発明者であると発表された事がある。而してその真相は次の通りである。

慶應年間西田虎次郎は横浜に往復するかご馬車を見れば馬に代るに人を用てせば軽便にその用途も亦多かるべしと暇を見ては図を画した当時虎次郎は荷車製造職人として高山幸助の所に居食していたが金貨をしていた和泉要助・鈴木

徳次郎から五両づつ貸り受けて人力車の製造を始めた。当時和泉要助は佃島鉄砲の舟宿の手代をし、その父が金貸しをしていた。鈴木徳次郎は八百屋を業とし又金貸しをしていた。虎次郎はこの金にて上填町の自分の家で人力車の製造をしたが完成して明治二年八月に人力車と命名した。明治三年四月に至り、和泉要助鈴木徳次郎・高山幸助の三名は牛馬取締役、福島蔵人氏に願ひ出て三人共同で日本橋際に挽車の営業を創めた。当時虎次郎は人力車製造の元祖の看板を出して日本橋上填町で人力車の製造のみをしていたが明治五六年頃(年代は、はっきりせぬ)この家は火事に会い京橋弓町十六番地に移転した

此処で長女に婿を買つてこの婿が挽車の営業を初め虎次郎は相変らず人力車を製造していたが又自転車もここで作つた。この自転車というものは今の自転車とは違って前の車の大きい丁度今の子供の三輪車のような物である。これを挽車の営業(當時は部屋車といった)して店先で子供の遊び具として貸していた。賃賃はい

くらか不明だが線香一本いくらとして貸していたものである。後に又京橋木挽町一丁目十四番地に移転した。和泉要助、鈴木徳次郎は共に車の製造など全然した事のない人で、又第三番目の秋葉大助氏は西田虎次郎の所へ人力車製造の弟子として後日弟子入りした人である。

以上の事柄を証明する物に次の様な事がある。明治六年埃太利万国博覧会に政府の命により四輛を製造して御地を買い明治十年には内閣博覧会にも出品して内務卿大久保利通より花紋賞牌を賜つており共に現在保存している。

尙前に和泉要助の所で一寸書いた和泉要助の年金給与の申請書はこの要助の娘の婿が弁護士をしており彼が申請したのだが、この制度を知つた同業者取締人が三十二年十一月老衰して来た西田虎次郎を憐れみ、六名連名にて人力車の発明者は西田虎次郎であると色々々の証明書を添えて年金給与の請願をして呉れた六名の人は竹川町六番地平民

宿車営業 酒井兼次郎
 天保十一年十一月生
 京橋区竹川町十七番地平民
 宿車営業旧取締役
 三原鉄次郎
 嘉永元年十二月生

深川区伊勢崎町三十六番地 平民
 宿車営業取締 山中新太郎
 天保九年十二月生
 日本橋区矢ノ倉町一番地 平民
 宿車営業旧取締役
 関根 藤吉
 嘉永元年九月生

日本橋区元大阪町十番地 平民
 宿車営業高橋市五郎
 嘉永二年六月生
 日本橋区馬喰町三丁目一番地 平民
 神尾喜太郎
 天保十三年八月生

向この申請の証人となった人等の名は次の通り。
 同町名主役 市川尙裕
 京橋区木挽町二丁目 煙草商
 当町挽子をしていた 富沢七
 神奈川県橋郡上平岡村 当時虎次郎の弟子
 高山源四郎

大要以上の通りである。なお最後に中川キン老人の話を一寸記して見よう。挽車の営業をする事を部屋車と云って挽子としては武士階級潰滅した後のその子弟が多かった。人力車及び自転車の貸賃はいくらだったか思い出せないが人力車な

ど全然作った事もない又営業はしても自分で引いた事もない二人と弟子であった者まで自分が發明者だと

鉄道記念物 (5)

額田喜代春

明治五年鉄道開業当時は、黒い土を焚き、黒煙を吐きながらわたちの音をとどろかせて走る蒸気機関車を見て当時の人々はキリンと恐れおののいていたといふが……

本年十月一日には東海道新幹線によって、電車で東京へ新大阪間五・五キロを四時間(一年後には三時間に到達の予定)で走る御時世とは夢のような話である。蒸気機関車は初めて、我が国に生れた時から今年で九十二年の歳月が流れたが、かつての「岡蒸気」時代から今日に至るまで、広く人々に親しまれ、鉄道を代表してきたのであるが、現在では幹線の檜舞台からその姿は次第に消え、その数も年と共にクシの歯が抜けるように減って、三五〇〇両位しかなく、かつては八、

式の前だれといいい、申し分のない古典らしい姿の機関車で、神田の交通博物館に保存されているが、館内随一のスターになりきっている。

交通博物館を訪れた人々は、この前で必ずカメラのシャッターをきっている。またこの機関車の模型が玩具に造られて、人気をさらっているようである。弁慶号はまず古い機関車の代表といってもよいでしょう。

弁慶号が通るとチン、チャララン、チャラランと鳴る音がよく聞こえたそうであるが、この鐘の音は、現在の機関車のように汽笛にすればよいのに、どうしてゆう長な鐘など鳴らして走っていたのだろうか、文

献を調べた処、なんでも汽笛では「にしん」が逃げて漁にさしつかえるから、鐘にしたんだらうと落語めいたことが記されていたが、実はアメリカに範をとった北海道鉄道が、全くアメリカ式の機関車を買ったまでで、アメリカでは駅の構内を走る時には、汽笛を使わず鐘を鳴らして走っていたからである。

文苑

お断り・前々号漢詩に誤植あるため、改めて左記に再掲いたします。

幽居 若杉 一所

黄梅熟処陰綠稠。
 烟雨噴瀟瀟小樓。
 奈此閉居無限悶。
 新茶三盞試盜甌。

親鶻花

滿庭來々啓丹唇。
 勝露凝粧似媚人。
 回首故山遙不見。
 子規啼處易傷神。

雨 だ り

沢村 福子
 利尻島焼け残りたる一つ家
 にあはれをそふる雨だりの
 おと

伊東みよ子
 雨だりに手をさしのべて幼
 子が戸口に母の帰りを待つ也
 佐藤 春子
 亡き夫と夢に語りひ雨だり
 の音をあさいの床にきくか
 な

三宅まさ子
 宵の雨の軒端を伝ふ音わび
 し旅寝の窓に明日を思えば

編集後記

会報を発行して三ヶ年号を重ねる三十五号、茨の途を克服して今日にいたりま... 小田原を中心として... 著しませぬ。視野を広くして歴史に關するもの、特に今日まで世に發表されな... 意見や論説なども尊重して掲載したいと思ひます。その意味でどしどしご投稿をお願いします。

(M)

小田原信用金庫

小田原市幸1の179
電話(0465)23121
理事長 鈴木十郎

御料理仕出し
御弁当

東華軒

代表取締役 飯沼相三郎

小田原駅前
TEL (0465) 5061~2

楽しい生活

明るい読書

八小堂

小田原駅前 TEL5388~9

志澤

TEL3131

小田原駅前

あさひ
食堂

あなたの暮しのムードをつくる

婦人・子供の店

小田原
メリヤス

小田原市錦通り
3837
TEL (0465) 3864

建築金物
家庭金物

株式会社
星崎仲吉商店

小田原市多古412番地
電話 2718

酒・ビール・食料品

今井重雄商店

小田原市幸三
電話2234~5

写真

イガラシ

小田原市幸3
TEL2534番

きそば
庵

小田原駅前
電話二八六二番

あなたの洋品店

はふや

小田原幸町
TEL 2307

家庭電化で明るい暮らしを

(有)岡田電器

小田原市十字1の22
電話2613, 5308

有限会社 あめあるよ
代表取締役 川口 浩

小田原市曾我谷津616番地
電話 (0465)473808番

印刷の御用命は
鶴井印刷所
有限会社
小田原市緑三ノ二七一
電話2421~七

料理割烹

だるま

小田原市幸1~10
TEL24128

セトモノの御用は
(陶磁器・陶管・植木鉢)

大川商店

TEL8513・3055

浄化槽の清掃修理

小田原市緑1の47

小田原衛生株式会社

電話25861・2468番
取締役社長 鈴木 浩

電気工事一式・設計・請負
販売修理

兵藤電気商会

小田原市下曾我駅前
電話国府津473578番

建築用材一式
(建築御用命一切承ります)

稲葉材木店

小田原市十字1~23 電話25621
新玉3~751 電話26884

小田原報徳
自動車株式会社
太陽自動車
株式会社
代表者 曾我律之助

伊豆箱根鉄道株式会社
大雄山線
運営事務所